

[学 会]

東京女子医科大学学会 第125回例会

日 時 昭和39年4月24日(金)午後2時より
場 所 東京女子医科大学 本部講堂

1. 患者から新たに分離された結核菌の生物学的性状

(細菌・三神内科) 野地 キミ

非定型抗酸菌はモルモットに対して病原性が殆どなく、Niasin 陰性、N.R 陰性で、普通寒天培地に発育するなどの諸点で人型結核菌と区別されている。

平野らは人型結核菌の保存株が普通寒天培地に発育する事を認め、非定型抗酸菌による病変は結核菌によるそれと同一であることを証明し、その他非定型抗酸菌と結核菌との間には抗原的に共通点のある事を明らかにし、また結核菌および数種の非定型抗酸菌を小川培地にまいて発生した集落の純培養についてNiasin test を行ない、人型菌においては多くは陽性だが、その中には弱陽性のものが見られ、非定型抗酸菌においては大部分は陰性だが微弱陽性および弱陽性のもの存する事を確認した。

演者は上記の成績に基づき、普通寒天培地によく生える人型結核菌分株から、各々数十個ずつの集落を分離し、それらの生物学的性状について検査を行なった。

また人型結核菌の保存株で普通寒天培地に発育する菌株は、グリセリン抜合成培地にも発育する。このグリセリン抜培地に発育した菌株の分離集落の中にも、Niasin その他、生物学的性状にその親株と異なるものが含まれるかも知れないと考え、同様の実験を行ない、大要次のような成績を得た。

患者から分離された結核菌のうち、Niasin 陰性を示すものは無かったが、微弱陽性のもの2株、Catalase 強陽性のもの1株、N.R 陰性のもの1株があった。しかしこれらの菌株においても、その他の性状は人型結核菌と同様の性質を示した。

グリセリン抜合成培地に発育を示した人型結核菌の保存株の分離集落からは、H₃Rv の集落2、青山Bの集落1株が Niasin 弱陽性を示し、青山Bの3株の集落だけがカタラーゼ強陽性を示し、Niasin 陰性、N.R 陰性の性質を示すものは無かった。

すなわち普通寒天培地に生え、グリセリン抜合成培地に生える人型結核菌の保存株では、生物学的性状の上か

らは変異株と思われるものは殆ど認められなかったが、患者から分離された結核菌の集落の中には、非定型抗酸菌と一部共通する性質を示すものが含まれていることを認めた。

2. カプトガニ網膜のチオニン染色に影響する要因分析の試み

(薬地生理) 植木キク子・菊地 鎌二

日本産カプトガニの側眼の単一個眼より照射によって生ずる slow potential の発生部位に関して、その origin が eccentric cell と retinula cell のいずれにあるかが問題になっている。

本実験の第一の目的は、それを決定する前段階として、両細胞の組織学的な性質の相違を検索することであり、その第一法として、Nissl 小体を metachromatic に染色するチオニンをとりあげた。チオニン染色に関するいくつかの文献をしらべてみると、著者により色々な方法がとられている。染色を組織中のある種の物質と染料との complex であると考え、その complex が形成される至適の条件がある筈である。そこで染色に関する要因を分析して、非専門家でも余り失敗しないで染色できる条件をきめようとしたのがもう1つの目的である。

その結果 retinula cell と eccentric cell はチオニン染色に対して異つた態度を示し、eccentric cell は核小体と核の周辺が明瞭に metachromatic に染色されるが、retinula cell では核小体が不明瞭に染まり、核の周辺は殆んどそまつていないことがわかった。

一方 Nissl body の metachromasia を明瞭に出現するためには、染色液をアルカリ性にすることが望ましいことがわかった。その他弁別液は酸性にしなの方がよいが、短時間であれば蒸溜水程度のpHでもよく、濃度は0.1~0.2%位、染色時間は20分位でよい。また染色温度は2°C~30°Cの間で殆んど染色状態に差がみられないことから、室温で十分であることがわかった。

3. 妊娠末期に見せる縦隔腫瘍(悪性胸腺腫の疑い)

の1例

(第二病院外科) 坪井 重雄・梶原 哲郎

○井上 久司・塩原 康司

妊娠経過中に発見した縦隔腫瘍(悪性胸腺腫の疑い)の1症例を経験したので報告する。

患者は25才の家婦。右頸部腫脹、呼吸困難、頭重、嘔声を訴え外来受診。右頸部腫脹、右上前胸部の静脈怒張を認め、胸部レ線像にて右上部縦隔よりの腫瘤状陰影発見。当時、妊娠9カ月であった。

入院後経過:悪性腫瘍の疑い充分なため、人工早産を施行。その間、前胸壁静脈怒張の増大。胸部レ線像、断層写真、静脈造影、その他臨床検査所見より、上中部悪性縦隔腫瘍にて、右腕頭静脈への圧迫ありと診断。術前放射線1600rを照射の後手術施行。

手術所見:右第3肋間にて開胸。右第2肋骨の前に、くるみ大の主腫瘍と数本の小指頭大の腫瘍の集合の状態であり、小児拳大、重量56g。右腕頭静脈への圧迫あり。腫瘍摘出後圧迫解消。剥離は比較的容易であった。

術後経過:良好。小量の抗癌物質と放射線4000rを照射。家事に従事中。

病理組織学的診断:悪性化の強い上皮細胞が淋巴性ないし、線維性組織内にあり、悪性胸腺腫の診断。ただ肺その他の癌の淋巴転移の可能性もありうる。

考按:悪性胸腺腫は36年3月迄で55例の報告がある。

1) 症状は縦隔腫瘍の圧迫症状の内、主として循環器、呼吸器へのものを示していた。

2) 静脈造影法が診断上重要視されて来ているが、この症例についても有意義であった。

3) 合併症として、胸腺腫との合併は、筋無力症、その他の報告例はあるが、妊娠との合併については、文献検索範囲では接していない。

結語:妊娠中発見した悪性胸腺腫の疑いの1治験例について述べ、2, 3の考察を試みた。

4. 原発性胃肉腫の1例

(外科) 織畑 秀夫・田中 孝

○伊野 照子・斉藤 洋子・中島 一己

胃に原発する悪性腫瘍は、その99%が癌腫であり、肉腫は1%という極めて稀なものとされている。

われわれは最近、65才の男性で、心窩部痛を主訴とし、高度貧血、無酸、レ線像で幽門部に陰影欠損を認めたので、胃癌と診断し胃切除術を行なったが、組織学的に胃リンパ肉腫と診断された症例を経験した。

胃肉腫は組織学的には、円形細胞肉腫、紡錘形細胞肉腫、悪性リンパ腫、平滑筋肉腫および血管肉腫等に分類

されている。

中でも悪性リンパ腫は、リンパ肉腫、細網肉腫、ホジキン氏病と分類され、細網肉腫が最も多く、次いでリンパ肉腫が多い。

以上の事から、われわれの経験した症例に文献的考察を加えて報告した。

5. [症例検討会]

腹痛、腹部膨満および腹水を主徴とした症例

司会 三神 美和教授

追って全文を本誌に掲載する。

6. 教室における痛風の経験

(整形外科) 田島 規子・山本喜美子

田中 稔彦・○仁科 文男

外来患者9727名中、関節痛を主訴として当教室を来院したものは13.7%であり、その中で痛風は37名で、年々増加の傾向がみられた。

痛風患者の初発は30才代から60才代が多いようであり、その大部分は第1趾基関節痛に始まり、初発以後における痛風発作も、やはり第1趾基関節に多発する。これら痛風発作はコルヒチンの短時日内服投与により、大部分消失した。

痛風患者の血中尿酸値は、90%以上が6.0mg/dl以上で、尿酸排泄剤により、大部分の例で、血中尿酸値を正常範囲に保ち、痛風発作の軽快又は消失をみた。

痛風患者37名中、6例に痛風結節を生じ、その発症部位は第1趾基関節に多いが、痛風発作における程には集中していなかった。結節例6名中、5例はその全部又は一部を剔除し、残る1例は他の疾患で死亡後、解剖により関節部等に尿酸結晶を証明した。

質問

中村 敏郎

一般に痛風は美食家に多いといわれるが、そのようなことを経験になりましたか。

応答

美食家というのを、肉食、たらこ、などのプリン体含有量の多いものを主として食べる人という意味では、痛風および高尿酸血症の人に、多少、多いようですが、特に、80%とか90%とかいう程の高率ではないようです。

7. いわゆる「しみ」に対する私見

(皮膚科) 中村 敏郎

俗に「しみ」と呼ばれる1群の顔面皮膚色素沈着症の分類について私見を述べ、その治療法に及ぶ考えである。

8. [綜説] 眼振の診断的意義について

(耳鼻科) 上村 卓也